

近現代史を知るきっかけに！

羽田 澄子

(はねだ・すみこ、映画作家)

2009年5月30日

方正友好交流の会・第5回総会での挨拶

ご紹介いただきました羽田でございます。このような所でこのようなふうにご挨拶にご挨拶するとは思っておりませんでした。今回私が創りました『嗚呼、満蒙開拓団』という映画が岩波ホールで一般上映できるようになり、皆様に観ていただけるようになりましたことは本当に良かったと思っております。

創りたい仕事ができなかった時代

私は、非常に長い間ドキュメンタリーを創る仕事をしてきましたが、こういう問題にこういう形で取り組むようになるとは、自分自身で本当に考えておりませんでした。しかし私は、もともと大連生まれでして、一時内地にいましたがその後、旅順と大連で暮し戦後三年経ってやっと日本に引き揚げてきた人間です。しかし日本に帰ってきてからは、しごと仕事で忙しく、しかも映画を創る仕事は、今は女性の監督もだいぶ出てきてはおりますが、私が映画の仕事をした頃は、女で映画を創る人は本当に少なく、いろんな意味で大変でした。しかも自分の創りたい映画をつくるという状況ではなくて、会社での仕事としての映画創りという状況が続いていたわけです。

私は岩波映画製作所が設立された時から社員になり定年まで働きました。それまでは会社の仕事ばかりを一生懸命にしていたのですが、定年退職してから自分のやりたいことをやるようになってきたのです。しかしなかなか残留孤児の問題まで目が届きませんでした。

『星火方正』で知った日本人公墓の存在

「満州育ち」で、引き揚げもみんなより遅く帰国していますので、どういうことが一体、旧満州で起きていたかということには潜在的な関心がありました。それを自分が映画の仕事にすることにはなかなか思いませんでした。しかし残留孤児の国家賠償請求訴訟の問題が起きてからは、中国残留孤児の問題が具体的にどうだったか、だんだん関心が強くなり、裁判には出来る限り傍聴に行くようになりましたが、それを映画に撮るというようなことはなかなか思いませんでした。ただやっぱり、この問題がこのようにあるということは、自分には避けられない問題だというふうには思っていました。映画にするには私の持っている力では無理じゃないかという思いがあり、なかなかできませんでした。そんな時に、映画にも描きました『星火方正』という冊子が、私のところに届いたのです。

これがどうして届いたのか、改めて訊いてみないとわからないのですが、まあパラパラ見ておりました。『星火方正』なんて何のことやら全然わからないものですから、いったい何の雑誌だろうと思って、しばしそのまま置いたままになっていました。しかしちょっと時間が出来て、何の冊子だろうとよく見ているうちに驚いたのです、本当に。

中国の方正というところに日本人公墓が中国人によって建てられたということが雑誌に書かれている。とてもショックを受けました。そして、「これはなんとかしなければいけない」と、その時にすぐに思っちゃったわけです。どんな映画にするとかいうことじゃなくて、「これは！」と思ったのです。そういうふうに思ったというのは、実は戦後、大連に3年暮らしておりましたが、その間に中国がどのように変わっていったのか、中国の人の恨みがどれほどのものか、ということ、ある意味では私の肌で知っていました。そしてその中で、中国共産党がどういうふうに考えていたのか、そして、その中で周恩来がどういう立場でいたのかということ、ある意味では、非常に生活感覚の中で私は知っていたということなのです。それでこの方正地区に日本人公墓が出来たということは、周恩来の判断によるものだという事、それを見た瞬間に、「これは映画にしたい。」と思ったのです。

運命を背負わされた映画

しかし中国の問題を映画にするのは、なかなか難しいことじゃないかと思ったのですが、方正へ行くツアーがあるということを知って、とにかく行って見てみようと思ったのです。そこで方正友好交流の会の大類さんや奥村さんとお会いしました。映画のロケーションというのいろいろ大変ですので、一体どうしてやればいいのかと思ったのですが、実に簡単に、大類さんと奥村さんが「いやあ、その面倒は私たちがみます」と言ってくださいました。そんなことがあるとは私は思わなかったもので、すぐに参加するようになりました。それがきっかけで出来たのがこの映画です。

私自身が言うのも変ですが、どういう構想でどういう映画が出来るかというのは、これは映画になるのかならないのか、わからないまま走り出してしまっ、大類さんからしょっちゅう、「これはどういう映画なんですか？」と訊かれて、私は困っていたのですが、「映画になるのかならないかわかりません。」と何遍言っても、大類さんは「もう映画は創り出しましたか？」というもので、追い詰められたということもありますが（笑）。

しかし創っているうちにいろんな形で道が開けてきて、この映画を創ることができました。これは私にとっては本当に生きている間に、いつか創らなければならなかった運命もっていた。私が運命を背負わされた映画ではなかったのではないかと、思っています。

若い人たちに知ってほしい歴史

無我夢中で創って、この映画がどのように人々に受け入れられるのかということ、面白いのか、つまらないのか。ほとんどいろんな意味での計算も立てないまま、夢中で創ってしまった映画です。ですから、最初に去年（08年）の秋に、映画祭で上映されるという時に、観にくる人がいるのかと思って不安でした。

映画がまだ完成しない前ですが、友人知人に今満州の開拓民の映画を創っていますと言うと、実は「うちの親も」とか「うちの親戚に」「知り合いに」旧満洲にいた人がいるという言葉が返ってきて、実に日本人の中に満州と関係のあった、関係を持っていた人がとっても多いということを知って驚いたわけです。

実際、去年の秋に、「東京国際女性映画祭」のオープニング作品としてこの映画が公開された時に、会場に入れきれないほどのお客様が見えたわけです。それで私は初めて、この映画の持っている問題の大きさというものが、まあ、創った人間がそんなことをいうのも

変ですけど、とっても大きな問題にぶつかったことに気がつきました。で今回、6月から7月末にかけて、岩波ホールで公開されるわけですが、今の若い人たちは日本の近現代史を知らない人が非常に多いわけです。一体、日本がどんな歴史を経てきたのか、しかも中国なり韓国にどういうことをしてきたかを知らない暢気な顔をしている若い人たちが大勢いるわけですね。そういう人たちが中国や韓国に行って受けたショックというのを、いろんな形で日常聞くことがあるのですが、なんとかこの映画が日本の近現代史をいろんな人に知ってもらう一つのきっかけになってほしい、と私はとっても思っております。どうぞよろしくお願いいたします。(文責：大類)



講演する羽田さん (写真・師岡武男)



7月31日、岩波ホールでの最終上映を終え、ホールのロビーで関係者の記念撮影。真ん中の中央が羽田澄子、向かってその右後方が制作の工藤充、前列座っているのが岩波ホールの原田健秀、その右中腰が岩波ホール支配人・岩波律子、向かって左端が自由工場の佐藤斗久枝諸氏など岩波、自由工房の人々。会からは奥村、大類もどういいうわけかいる！